

女性医師が輝き続けるために～地方の外科教室の挑戦～

徳島大学医学部医師会 島田 光生
(消化器・移植外科)

先日のDDW（消化器病週間：京都）2009の会期中に開催された日本消化器病学会女性医師・研究者の会第8回集会で依頼された特別講演の内容を抜粋して、私どもの基本的スタンスを皆さんに知っていただきご批判をいただきたいと思います。

OECDの調べ（2008年）では、各国の全医師に占める女性医師の割合は、スウェーデンが42%、英国、ドイツ、フランスがそれぞれ39%、イタリアが35%、米国が30%となっており、わが国は約17%ですが今後女性医師の数は増加していくことは確実（今後10年で欧米並み）と推定されています。外科志望者の年次推移でも男性は減少しているのに対して女性は増加しています（ただし、“3K”である消化器外科（肝胆膵外科）を目指す女性医師は少ない）。地方では外科入局自体が減少し、男女の別を考えず外科医になる若手をリクルートし育成することが急務になっています。そこで進化するオンリーワン徳島として“女性外科医が一番働きやすい”職場を作るための我々の試行錯誤について、問題点の抽出と対策の実践に分けてご紹介します。

問題点の抽出に関して、外科学会のアンケート調査では、勤務満足度や上司からの理解については思ったほど男女で差がなく男性医師も不満が多いことが分かりました。一方、キャリア形成の障害については、女性外科医で体調・体力、結婚、出産・育児などが多く、そのための支援として院内保育所の整備、病児保育、ワークシェア、フレックスタイム、再教育・再就職制度などの充実の要望がありました。また、学会の役員や評議員にお

ける女性の割合が極めて少ないという象徴的な結果が出ています。これに関して臨床外科学会会長の出月康夫先生は、これからの我が国の外科医療を支えていくためにはさらに多くの女性外科医の参画が不可欠で、学会としても女性会員がさらに積極的に外科臨床の場で活躍し、さらに学会の運営や活動にも参画できる体制の構築を強調されています。徳大関係の女性外科医へのアンケート調査でも概ね外科学会のもと同様でしたが、嬉しいことに女子学生に外科を勧める割合が40%と多いようでした（外科学会のアンケートでは15%）。徳大関係のアンケートから女性消化器外科医には、1）女性であることによる体力不足への対応、2）女性であることでの仕事・昇進の差別への対応、3）産後のスムーズな職場復帰、育児・家事の支援、4）既婚者が学会に参加しやすい環境作りが必要であることが分かりました。日本外科学会調査でも、女性外科医が抱える3つの課題として、勤務体制、キャリアアップの障害（特にキャリアモデルがないこと）、専門医となることの困難さが取り上げられており、特に制度の整備だけでなく関係者の意識改革が不可欠であることが強調されています。

対策に関しては、1）体力不足（手術）への対応、2）キャリア形成のモデル作成、3）女性の特性の最大限発揮、4）産休・育児中のモチベーション維持、そして5）楽しく続けられる雰囲気づくりをそれぞれ実践中です。

1）体力不足への対応：力仕事の軽減のため視下手術（座ったままでも手術可能）への移行を進めること、また長時間の手術にも参加を可能にす

オピニオン

るために手術における役割分担の導入を行っています。例えば、生体肝移植レシピエント手術の平均手術時間は774分ですが、動脈吻合のパートは102分です。さらに今後、手術支援ロボット（ハイテック）が臨床に導入されると、これまでの男性にしかできなかった体力勝負や力技の開腹手術が、女性の方がむしろ似合っている手洗いもいらず座って楽にできるロボット手術に変わっていくわけです。

2) キャリア形成のモデル作成：早くから国内学会のみならず国際学会での発表経験を積みませ（Global化）、研究の楽しみの体得や博士号取得を経験させ、さらには早い時期に海外留学の機会を提供し帰国してからは文部教官の道を歩んでもらうように指導を始めました（既に金本君が卒後5年目でスウェーデンのカロリンスカ大学外科に留学しています）。

3) 女性の特性の最大限発揮：大腸肛門領域の女性外来の設置を始めています。実際、早くから専門上級医とともにペアで外来修練を行い出来るだけ早く単独で外来診療できる素養を高める工夫

をしています。消化器以外だと乳腺外来、泌尿器科外来、婦人科外来、etc. が考えられます。

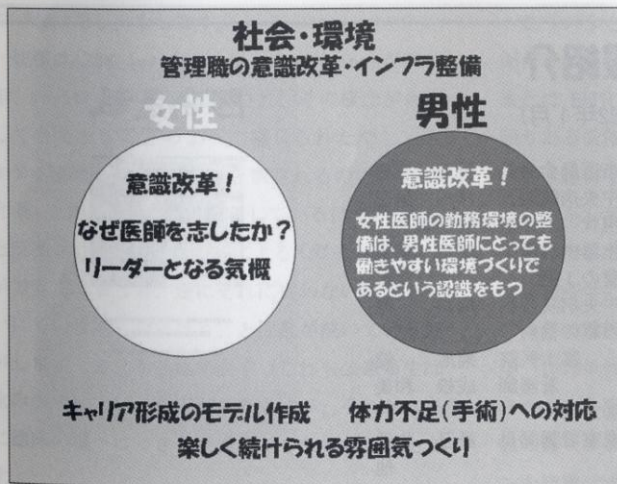
4) 産休・育児中のモチベーション維持：手に職をつける（専門医、技能医の資格の取得）、産休・育休中にも手術の指導や外来診療（指導含む）に求てもらうようなシステム構築を手掛けるとともに、地方での学術セミナー開催や e-ラーニング（学会の専門医講座など）による学習機会の提供を始めています。

5) 楽しく続けられる雰囲気づくり：阿波踊りや教室パーティーなど積極的な楽しい(?) 行事づくり、面倒をとことんみる教室の雰囲気（現代版 大家族社会）づくり、女性外科医たちの情報交換の場である徳大外科女医会の定期開催などを行っています。

図1に女性が輝き続けるための私見をまとめてみました。Paradigm Shift、すなわち時代・意識の変革として、社会・環境では管理職の意識改革やインフラ整備、女性自身の問題として、なぜ医師を志したか？あるいはリーダーとなる気概を含めた意識改革が必要です。また男性医師には、女

性医師の勤務環境の整備は男性医師にとっても働きやすい環境づくりであるという認識をもつ意識改革が必要です。その他、前述の如くキャリア形成モデルの作成や体力不足（手術）への対応、そして楽しく続けられる雰囲気づくりが必要です。いずれにせよ、保育施設の充実や短時間勤務制の導入など、妊娠・出産・育児中の女性医師のための体制整備を進めても、それを活用できるか否かは、上司・同僚など周囲の理解に左右されることをあらためて銘記することが重要です。これに関連して大

図1. Paradigm Shift



オピニオン

阪厚生年金病院の清野佳紀先生も次のような興味深いコメントをされています。「ボスがどれだけ戦力として考えるか、どれだけケアするかが肝心。女性が働き続けるのを拒むのは「男性の無理解」であり制度を充実させると、女性だけでなく男性にも人気が出る。すなわち意識の変革が大切です。」

私はキング牧師のように夢見ています（“I have a dream”, Washington DC, 1963）。“女性外科医が一番働きやすい教室という夢は語られてこそ実現

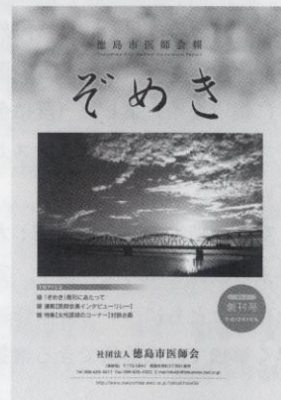
し、夢というものはそれが優れた語り手を得た時に初めて実現へ向かってその一步を踏み出すものである。そして人は夢を語ることによって成長し輝き続けるのである”。女性医師のみなさん、夢は語られてこそ実現するのです！

最後に徳大外科ホームページ（<http://www.tokugeka.com/>）の中に、女性の“ブラックジャック”を目指すひとたちというコーナーを作っておりますので、是非お立ち寄りいただきご批判など頂ければ幸いです。

医報・会報紹介

■徳島市医師会報（No.1 創刊号 平成22年1月号）

- ◆ ごあいさつー「ぞめき」発刊にあたってー
徳島市医師会長 豊崎 經
- ◆ 祝辞
徳島市長 原 秀樹
徳島県医師会長 川島 周
- ◆ 徳島市医師会 役員紹介
- ◆ 会務報告
- ◆ 徳島市民病院のコーナー
- ◆ 連載【医師会員インタビューリレー】第1回 三谷 力
- ◆ 特集【女性医師のコーナー】対談企画
桜井 えつ・坂東 智子
- ◆ 徳島市医師会事業の紹介
- ◆ 編集後記 他



医報・会報紹介

■阿南医報（2009 No.161 平成22年1月）

- ◆ 年頭挨拶 阿南市医師会会長 児玉 一郎
- ◆ 新年のご挨拶 阿南医師会中央病院院長 澤田 誠三
- ◆ 当院における肝炎・肝癌治療の現状ー治療の最前線ー
徳島県立中央病院消化器内科医長 柴田 啓志
- ◆ 当院で経験したS字状結腸膀胱瘻の1例
阿南医師会中央病院外科 澤田 徹
- ◆ 日曜・祝日診療所における診療内容の検討
富士医院 菊池 健
看護師 成松 和美
- ◆ 勤続15年の表彰をうけて
- ◆ ピンクリボンキャンペーンに参加して
病診連携室看護師長 辰己 和子
- ◆ 編集後記 他

